

§ 8 意志の自由 (その2)

■ Livet's experiment と両立する自由の擁護

< 擁護1 >

- 1、意志が自由であるとは、意識的な意志決定の時点において、その決定が自由に行われることを必ずしも必要としない。
- 2、意識的な意志決定の時点の前に、無意識的に意志決定が行われており、しかもその無意識的な意志決定が自由に行われているのであれば、そのときには意志が自由であるといえる。自由な意志決定は、まず無意識的に生じて、その後それが意識されるのだと考えれば、リベットの実験に対して、意志の自由を擁護できる。

< 擁護2 >

運動野の準備電位の上昇があつて、大体300ms後にボタンを押そうと意志することがあるとしても、その時間は10msくらい前になったり、あとになったりしたかもしれない。つまり、20msくらいの間のいつ押すかの自由の余地があるのではないか。リベットの実験の範囲内であっても、なお微細な自由の余地がある。

< 擁護3 >

「いつでも自由に押してください」と依頼して、被験者は「はい、自由に押します」と応えて、実験する。この実験が可能であるためには、「自由にボタンを押す」ということが被験者にとっては可能でなければならない。つまり、誰にとっても、「自由にボタンを押す」ことが可能であるということがこの実験の前提になっている。つまり、意志が自由であると思っていなければ、この実験はできない。(実験者が自由意志を認めていなくても実験することができるのだろうか。彼が被験者に「いつでも自由にこのボタンを押して下さい」というとき、彼は何を依頼しているのだろうか?)

< 擁護4 >

意志決定は、内言の発話として行われる。

「いつボタンを押そうか」「今だ」

問いとの関係において「いまだ」は有意味な発話、有意味な意志決定になる。したがって、意志決定は、「今だ」を発言した時に行われるのではない。問いが立てられ、それに対する答えが出されるという一定の時間経過によって、自由な意志決定が成立すると考えることができる。つまり、問答の時間経過によって、意志決定が成立すると考えれば、リベットの実験に対して、意志の自由を擁護できる。

■ 論理的決定論

(ダントー『物語としての歴史』国文社、「第9章 未来と過去」より)

- (1)pは必然的に、真または偽である。
- (2)pが真ならば、pが偽であることは不可能である。
- (3)pが偽であることが不可能ならば、pが真でないことは不可能である。
- (4)pが真でないことが不可能ならば、pが真であることは必然的である。
- (5)pが真ならば、pが真であることは必然的である。

同様の論証によって、

(6)pが偽ならば、pが偽であることは必然的である。

(1)、(5)、(6)から、

(7)pが真であることは必然的であるか、またはpが偽であることは必然的である。227

アリストテレスによれば、このような論理的決定論は、行為の不可能性と人間の思慮の有効性を排除する。そこで、アリストテレスは『命題論』の中でこれを反駁しようとする。

そのために、アリストテレスは、(1)を偽であると考え。つまり、「すべての命題は真か偽のいずれかである」ということは必ずしも成立しない(排中律の批判)。229

未来についての言明、あるいは個々の事物に関する未来の言明については、アリストテレスによれば、(1)は当てはまらない。231

・論理的決定論を避けるためには、排中律や二値原理の制限が必要である。つまり、古典論理以外の論理(直観主義の論理など)の採用を必要とする。

自由意志の成否は、「自然が法則によって完全に決定されているかどうか」という問題、また心身問題と関係しているが、それだけでなく「世界がどのような論理法則をもっているか」という問題とも関係している。

・もし自由を理解するのに、反事実的条件法が必要であり、それが様相論理ないし可能世界意味論によって有意味に語れるのだとし、論理的決定論を回避するために、直観主義論理のような非古典論理が必要だとすると、意志の自由について有意味に語るためには、例えば直観主義様相論理を採用することが必要になる。